

資本制的生産様式における労働疎外の考究(四)

水 谷 謙 治

はしがき

第一章 初期「労働疎外」論の概観……………以上第二十五卷第二号所載

第二章 資本制的生産様式における「労働の疎外」

序 節 『資本論』の諸草稿における「労働疎外」の規定

第一節 単純商品生産における「労働疎外」の端初的形態

〔I〕 商品に関する基礎的考察

〔II〕 単純商品生産における「労働疎外」の端初的形態……………以上第二十五卷第四号所載

第二節 「労働疎外」の展開過程

〔I〕 「労働疎外」の基本的前提条件——労働力の売買——

〔II〕 労働過程と価値増殖過程に関する一般的考察

〔III〕 「労働疎外」の展開(その一)……………以上第二十六卷第一号所載

〔IV〕 「労働疎外」の展開(その二)……………以上本号所載

第三節 本章のまとめ

第三章 初期「労働疎外」論と『資本論』との関連

資本制的生産様式における「労働疎外」の考究

〔Ⅳ〕 「労働疎外」の展開（その二）

A 機械制大工業における「労働疎外」

(一)

周知のように、機械制大工業は工業における資本制的生産様式の最高の発展段階であり、その基本的特徴は、生産のための機械体系の使用である。ここでは、この機械制大工業における「労働疎外」のあり方がとりあげられる。

まず、生産様式という観点から、機械制大工業の主要な諸特徴を、マニユファクチュアのそれと対照しつつ提示することにしよう。

第一に、マニユファクチュアでは、労働手段が個人的に使用しうる道具であり、動力は人間力であるのにくらべて、機械制大工業では、労働手段は機械であり、動力は他の自然力である。⁽¹⁾生産様式の変革は、前者にあっては労働力を、後者にあっては労働手段を出発点としている。

(1) よく知られているように、発達した機械は、動力機、配力機構、作業機という三つの部分からなっている。本来の道具が人間から一つの機構に移されると、単なる道具にかわって機械が現われるのであって、本来の作業機においては、およそマニユファクチュア労働者の充用する道具や装置が、人間の道具としてではなく、一つの機構の道具として再現される。産業革命はこの作業機を出発点とする。当初は、動力という純機械的役割がなお人間に委ねられているが、人間は均等で強力なかつ連続的な運動の生産用具という点で極めて不完全である。だから、作業機の大きさや作動する道具数が増大して大規模な運動機構と強力な動力が必要になるのに応じて、動力機が出現し配力機構が巨大な装置になってゆく。他方、それとともに当初の作

業機は、機械生産の単なる一要素に転落する。

第二に、マニユファクチュアでは、生産は労働者の熟練、経験、力に決定的に依存しているが、機械制大工業では、それらの諸契機は生産過程への自然科学、技術学の応用や機械装置によって代置される。前者では科学が排除されるのに対して、後者では全過程が客観的にそれ自体として観察され、それを構成する諸段階に分析され、種々の部分的諸過程を遂行しかつ結合するという問題が、力学、化学等の技術的応用によって解決されるのである。

第三に、マニユファクチュアでは、道具を用いる個々の労働者自身の協業と分業が行なわれるのに対して、機械制大工業では、同種の機械による協業と異種の部分的機械による分業とが行なわれる。ここでは、機械体系の充用というかたちで、協業に基づく分業が再現されるのである。だから、マニユファクチュアにおいては、社会的労働過程の編成は「純主観的」であり、部分労働者の組合せとして現われるのに対して、機械制大工業においては、それは労働者に対して既成の物的生産条件として存在する客観的な生産有機体として現われる。

第四に、マニユファクチュアでは、熟練や経験に応じて分類されるところの特殊化された労働力の等級制が特徴的であるが、機械制大工業では、こうした等級制の技術的基礎が墜棄されて労働の均等化の傾向が特徴的になる。そして、前者で人為的につくりだされる複雑な部分労働者間の差異に代って、年齢と性という自然的差異が主たる区分として登場する。また、自動機械工場で分業が再現する限りでは、マニユファクチュアで有機的に編成されていた組⁽²⁾代って、機械装置について労働者とその補助をする補助労働者との区別が基本的なものとなる。

(2) なお、「これらの主要部類のほかに、機械装置全体の調整や平常の修理に従事してその数から見ればとるに足らない人員がある。技師や機械師 (Machinist) や指物師 (Schreiner) などがそれである。これは、かなり高級な、一部分は科学

的に教育された、一部分は工業的な、労働者部類であつて、工場労働者の範囲外に属し、ただ彼らと一緒に混じっているだけである」(「K¹」, I, S. 443, 訳・P, 549)。

いうまでもなく、ここで工場労働者の範囲外に属するとされる労働者部類のこうした指摘は、綿紡績、織物工業を中心とした当時のイギリス工業の観察に基づくものである。右の部類の具体的あり方は、大工業の発展——とくに第二次大戦後におけるオートメーション工場の発展——における労働の変化に伴つて当然に変化する。たとえば、かつての機械師にある程度類似した役割を果す労働者は、その一部が自動機械装置を監視したり調整したりする工場労働者に組み込まれるようになる一方、一部の専門的技術者や一部のいわゆる「ホワイトカラー」が工場労働者の範囲外に属する部類として登場するようになることもその実例といつてよいであらう。

第五に、マニユファクチュアでは、労働力の結合は労働力や労働過程自身の特性や労働過程の分立に基づいており、その規模も小さく協業的性格も未発展である。だから社会化された労働者による個別的労働者の駆逐は、多分に偶然的なものとして現われる。これに対して、機械制大工業においては、労働力の結合、その協業的性格は、労働手段の性格によつて技術的に規定された必然的なものになる。労働手段の規模および組合せが巨大化しかつ複雑化する。また、自動機械体系における諸工程の緊密な相互依存性、連続性、迅速性が強められる。これらのことが、労働の結合の規模および協業的性格を規定し、それを飛躍的に高め、発展させるのである。

右のように、マニユファクチュアと機械制大工業とはきわだつた相違点を有しているが、しかし、後者は技術的にも物質的にもその諸条件を前者によつて準備され、前者の発展の産物として生じたことも看過してはならない。

すなわち、マニユファクチュア時代において、労働用具が部分労働者の専門的で特殊な機能に適合させられ、その改善ならびに単純化と多様化が促進されることによつて、単純な諸用具の結合から成り立つ機械装置の物質的諸条件が創出されたのである。また、ヴォーカンソン、アークライト、ワットらの発明が実用化されるにいたつたのは、ひ

とえに、彼らがマニユファクチュアで生成し供給される多数の熟練労働者を見出したからである。

さらに、マニユファクチュア時代にも労働用具をつくる作業場——ことにすでに使用されていた機械的装置を生産する作業場（たとえば、パーミンガムにおける金属機製造マニユファクチュア）——が存在していたが、発明の増加と新たに発明された機械需要の増大につれて機械製造が各種の部門へ分化し独立化されるとともに、機械製造マニユファクチュア内部の分業もまた発展していった。こうした機械経営の発展や機械の新しい生産部門への侵入は、マニユファクチュアの狭い技術的基礎によって極度に制限されていたが、しかし一定の発展段階に達すると、大工業は自己が自然発生的に生れてた基盤と技術的にも矛盾するようになる。つまり、機械が増加し、その構成部分の複雑さ、多様性、法則性、自動体系化、加工困難な材料使用等々の課題が増大するようになると、それらの解決がいたるところでマニユファクチュアの狭い手工業的技術、人的制限に衝突せざるをえぬようになる（さらにこの狭い技術的基礎は、マニユファクチュア時代に発展してくる生産上の諸要求——たとえば、社会的分業の深化と拡大、労働手段と労働者の集中、多様で大量の生産物の規則正しい供給等の要求——と矛盾せざるをえなくなる）。こうして、大工業は、機械そのものを機械によって生産せざるをえなくなるのであって、このことよって始めて、大工業は自分自身に適合する技術的基礎を創出し、自分自身の足で立ちうるようになるのである。一九世紀の最初の数十年間に機械経営が拡大されるにつれて、実際に機械は、仕第に道具機の製造を支配するようになった。⁽³⁾

(3) 「イギリスで作業機の道具のうちで、機械によって製造される部分がたえず増大するのは、ようやく一八五〇年頃からである」(「K', I, S. 394」。

なお、機械による機械の生産の最も本質的条件は、どんな出力でも可能で完全に制御しうるような原動機が存在すること、また、個々の機械部分のために要する線、平面、円錐、球などのような正確な幾何学的形態を機械で生産することであるが、

当時は第一の条件は蒸気機関の出現によって、第二の条件は、モーズレーによるスライド・レスト（施盤滑台）によって解決された。とくに後者は、「なんらかの特殊な道具にとって代るのではなく、たとえば鉄のような労働材料に切削工具の刃をわわたり、合せたり、立てたりすることによって一定の形状をつくりだす人間の手そのものにして代るのである」（K. I. S. 406. 訳、p. 502）。

(一)

さて、機械制大工業における「労働疎外」のあり方の特質はどのようなものであろうか？ あらかじめごく簡潔に要約すれば、それは、機械制大工業のもとで創造される労働のすべての社会的生産力が全部資本の力として労働者に自立して現われること、発展するあらゆる労働力能が労働主体から失われ、彼らの若痛、犠牲の増大として、また、機械、資本への彼らの従属の完成として現われること、これまでも同様に、右の内容を多少とも詳細に考察してゆこう。

まず、機械制大工業で生ずる労働力の全社会的生産力が、労働主体とは無縁で独立した他者（資本）の力の増大として現われる点について。

機械制大工業のもとで、労働の生産力が飛躍的に発展することは、(一)で考察したことからみてまったく明白である。

なによりもまず、人間はこれまで彼らの身体内部にもっていた限られた個人的力や熟練への依存から解放される。第二に、各種の機械、装置、原材料、生産物の量や規模や速度の技術的比率がつけられ、労働過程全体の連続性、速度、エネルギー、計画性、秩序、統一性が大きく高められる。第三に、生産の規模が決定的に増大する。第四に、機

械自身の改善と労働時間の短縮によって、一定時間内に流動する労働力の緊張度も高められる。第五に、生産過程を種々の構成段階に分解してそこに生ずる諸課題を自然科学、技術学の応用で解決するという大工業独自の原理に基づいて、科学、技術学の発展と応用が無限に促進されてゆく。第六に、労働手段、原材料、生活手段の大量の増加に応じてそれらの生産が無数の独立した部門に分立化し、社会的分業が（と同時にその要求による交通、運輸業が）発展する、等々。

だが、あらゆる生産諸条件がいかに飛躍的に発達し、労働の生産力が著しく前進しようとも、その諸条件の所有者が資本家だという事実には変わりはない。だから、それらの諸条件の充用に関する一切の基本的行為は、究極的にはすべて資本家の機能として現われ、したがってそれらの充用から生ずる生産力も資本の生産力として現われる。たとえば、動力機の充用によってもたらされる巨大な自然力も、また熟練に代わる作業機の正確で迅速な作業能力も、それらの機械が資本の一要素である限り、つねに資本に属する力として現われざるをえない。

同じことは、自然科学や技術学についても生ずる。それらは実際に個々の労働者の技能や知識から分離され、それらが労働過程に応用されるばあいにはつねに資本に合体されたものとして現われる。機械を充用する資本家は、その機械に関する科学や技術学に「専門家」ほど精通する必要はない。だが、機械に実現された科学、技術学は資本として労働者に対立するのであって、それらはただ、労働者の搾取手段としてのみ、したがって、資本にそなわった力としてのみ、彼らに対立して現われるのである。

さらに、機械制大工場にみられる労働力の社会的結合も、機械体系の各部分に労働力を配分し組織する資本家の機能として行なわれる。確かに、労働力の發揮自体は各労働者のものであり、彼が資本家に与えるものといえるが、工

場における労働力の社会的結合という点からすれば、それは、個々の労働者が主体的に行なう相互の関係行為としての結合ではないし、彼らの機能なり労働手段なりを彼らの自由な意志の統制下におくような結合でもない。その結合は、彼らの意志とは無縁な資本家の意志と命令に基づく資本による編成として、個々の労働力に対立し、彼らにいわば強制されるのである。したがって、このばあいには、個々の労働者は工場全体を形成する資本の総労働力の単なる一器管として機能するに過ぎず、労働過程の社会的性格も、彼らの結合から生ずる社会的生産力も、労働者から独立し彼とは疎遠な資本の性格として、あるいは、資本の力として現われるのである。かくして、資本制の大企業の力が巨大なものになればなるほど、労働者個人はますます小さく、とるにたりないものとして現われざるをえない。⁽⁴⁾

(4) 「本来の独自の資本主義的生産様式のもとの相対的剰余価値の発展につれて労働の社会的生産力も発展するのであるが、この発展につれて、この生産力も直接的労働過程での労働の社会的関連も、労働から資本に移されたものとして現われるようになる。それだけでも資本はすでに非常に神秘的なものになる。というのは、労働のすべての社会的生産力が、労働そのものではなく資本に属する力として、資本自身の胎内から生れてくる力として、現われるからである」(「K. III, S. 835, 訳, P. 1060)。

「実際、協業における共同的な統一、分業における組合せ、自然力や科学の応用、労働生産物の機械としての応用——すべてこれらは個々の労働者に対しては、無縁なもの、物的なもの、既存のものとして、労働者の関与なしに、またしばしばそれに反して、独立に相対するのであり、それが物的なものである限りでは、労働者に従属しないで彼らを支配する労働手段の単なる存在様式として彼らに相対し、また、工場全体が組合せによって形成される限りでは、資本家……に化身した工場全体の認識と意志とを、資本家のなかに生きている資本の諸機能として彼らに対立させるのである。彼ら自身の労働の社会的諸形態……は、個々の労働者にはまったくかわりなしに形成された諸関係である。労働者たちは、資本のもとに包摂されたものとして、これらの社会的な形成物の諸要素になるが、これらの社会的形成物は労働者のものではない。それゆえ、これらの形成物は、資本そのもののいろいろな姿として……労働者たちに相対するのである」(「Lesultate», S. 490, 訳, P. 134—135)。

なお、機械が生産物に付加する価値部分を除外すれば、機械は、資本にとって水力や電力のような自然力と同様にまったく無償で働くのであって、このことはすでに、単純協業やマニユファクチュアで発揮される独自の労働生産力が資本にとって無償であったのとまったく同様である。ただ、機械の生産的活動が大きいだけに、その無償奉仕の大きさも以前よりもいっそう大きいといえる。「大工業においてはじめて人間は、自分の過去のすでに対象化されている労働の生産物を大きな規模で自然力と同じように無償で作用させるようになるのである」(“K”, I, S. 409, 訳、P. 506)。

(三)

つぎに、労働の社会的生産力の発展が、労働者における労働諸能力の喪失、労働における苦痛、犠牲および資本への従属等々の増大として現われる点についてみてゆこう。

一、労働諸能力の喪失、「労働の無内容化」、「労働苦」。

機械制大工場の内部にあつては、労働者の労働は資本家のための労働であり、つねに資本家によって指揮され監督される労働である。労働力は、それが資本家によって購入され、彼のものになった以上は、精神的、肉体的限界内では、資本家の思いどおりに使用される生産要素にほかならない。この点では、労働者は巨大な機械体系の歯車として、与えられた作業に黙々と従事しなければならぬ。そのさい彼は、自分の作業に必要な限りの忍耐力や注意力を支出する以外になんの精神的能力も発揮する必要はない。とりわけ、個々の労働者が全生産過程や工場全体に関する計画や統制、あるいは科学の応用や研究という精神的能力を発揮する必要は、まったくない。むしろそうした諸能力

は、彼の労働からは分離された疎遠な存在にすぎぬもの、資本に属する力能、としてのみ發揮されるのである。

独立した小商品生産者のばあいには、彼らは小規模ながらも生産過程全体に対する知識や理解力や意志力をもち、それらを現実に發揮していた。だが、そうした精神的力能は、ここでは彼らとは無縁で独立した資本の力たる科学として、労働主体から失われるのである。ここでは、生産上の精神的諸力が一方の面では飛躍的に發展し、その範囲を拡大すればするほど、他面ではそれらが失われてしまうのであって、労働者たちが失うものは、彼らに対立して資本のうちに集積されるのである。

同じことは、労働の熟練や労働で發揮される力の強さ等についてもいえる。こうした契機は、マニファクチュアにおいては生産上の成果を左右する決定的契機をなし、マニファクチュア労働者のもつ最も重要な要素であった。しかし、ここでは、そうした諸契機は機械によって代替され、彼らから失われるのである。⁽⁵⁾

(5) このことを端的に例証しているのは前述したスライド・レストである。「この機械装置は、なんらかの特殊な道具にとつて代わるのではなく、たとえば鉄のような労働材料に切削工具の刃をあてたり、合わせたり、立てたりすることによって一定の形状をつくりだす人間の手のものにとつて代わるのである。このようにして、個々の機械部分の幾何学的な形状を、『どんなに熟練した労働者の手のどんなに積み重ねた経験でも与えることができないほどの容易さと精確さと速さとで生産すること』(『諸国民の産業』、ロンドン一八五五年、第二部からの引用——水谷)に成巧したのである」(『K. I, S. 406, 訳、P. 502 傍点、水谷)。

あるいは、熟練が機械生産の新局面で新たに生ずるばあいでも、内容を奪われた個々の労働者の細部的熟練などは、「機械体系において物体化され、機械体系とともに『主人』(Master)の権力をなす科学や巨大な自然力や社会的集団労働の前では、とるにたりない小事として消え失せる」のである(『K. I, S. 446)。

以上のように、生産過程の諸能力——とりわけ精神的力能——を資本の所有として労働者に対立させる過程は、すでにマニファクチュアでもみたところであった（本稿第二章第二節〔Ⅱ〕参照）が、この過程は大工業において完成されるのであって、ここでは、独立した力としての科学が労働過程へ応用されればされるほど、労働過程の諸能力が労働者から疎外されるのである。

ところで、精神的諸能力の發揮が不要化されることは、それらの正常な自然的發揮が抑圧されることにつながる。また、機械の充用によって労働過程が単純化され、同じ機械的過程の単なる反復が行なわれるばあいには、神経の疲労とともに筋肉の多面的作用が抑圧され、身心の自由な活動が抑制されざるをえない。したがって、機械制大工業においては、労働者の精神的、肉体的諸能力の全面的で自由な發揮が抑制され、「労働がその内容から解放される」（K. I. S. 46）のであって、このことは、「労働の無内容化」と表現することができる。そして労働者が、この「労働の無内容化」を長期に渡って強いられることは、彼の労働力が不具化することを意味している。

確かに、大工業は生産の技術的基礎をたえず変革し、労働機能や生産の社会的編成を変化させるから、労働の轉換や労働者の全面的可動性が必然化し、一人の労働者を生涯一つの部分的作業に拘束する「マニファクチュア的不具化」は除去されるようになる。しかし他面では、従来の分業体系は当分は遺習として存続し、ついで搾取の手段として組織的に利用され、再生産されるのであって、この面では、労働者は一つの部分機械に長期間縛りつけられ、労働力の不具化を余儀なくされざるをえないことになる。⁽⁶⁾ そしてかかる「分業」の再生産は、本来の工場では労働者を一つの部分機械の自己意識的な付属物に転化することによって行なわれ、他の分野では、一部は機械と機械労働の散在的使用によって、一部は分業の新たな基礎としての婦人労働、未成年労働および非熟練労働の導入によって行なわれ

る。なお、かかる「不具化」がとりわけ顕著に現われるのは、未成年労働者が成年者になっても長期間きわめて単純な同一労働に縛りつけられ、後年彼らをこの同じ工場で役立たせるだけの労働さえも習得しえないような場合である。⁽⁷⁾

(6) 「機械を監督して、切れた糸をつなぐことは、労働者の思考を要するほどの活動ではないが、また他面においては、この種の仕事は、労働者が自分の精神をそのほかに使うのを妨げるような性質をもっている。同時にわれわれは、この仕事は筋肉に対しても、肉体的活動に対しても、少しも活動の余地を与えないことを知った。こういうふうには、この仕事はもともと仕事とはいえないものであって、まったく退屈なもの、世のなかでもっとも抑圧的で、もっとも疲労させるものなのである——工場労働者は、このような退屈さのなかで、その肉体的および精神的力を完全に腐朽させてしまうように、運命づけられているのだ」(エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』、全集第二巻、S. 397, 訳、P. 409)。

(7) ただ一つの活動を発達させるために、他のすべての精神的肉体的諸能力が犠牲にされるといふ法則は、労働者だけではない。彼らを直接間接に搾取する資本家にも作用している。全てのもつて人間を人間の尺度では判断しえず、利潤を根本的尺度にしてしか判断しえない人間が、また自分の資本の維持拡大にのみ汲々として生きているだけでなく、現実には手足を働かせて生産する能力をも喪失している人間が、どうして正常な人間といえるであろうか。しかも彼らの大部分は、この不具化に物質的な安樂さと満足さえも感じているのである。

他方、労働者にとって彼の労働は、その精神のおよび肉体的能力の自由で多面的な發揮を抑制される点でも、同じ単純な機械的労働の反復に耐えねばならぬ点でも、またそもそも生活の余儀ない手段であり、他者の私的利益のために行なう非自発的な労働にすぎないという点でも、それは苦痛を伴ったものとならざるをえない。⁽⁸⁾と同時に、彼は、自分の労働に対する積極的関心さえ喪失することになる。⁽⁹⁾

(8) 「もしも自由意志による生産活動が、われわれの知っている最高の喜びであるとすれば、強制労働こそ、もっとも残酷で、もっとも屈辱的な苦痛である。毎日から晩まで、なにか気に入らない仕事をしなければならぬことほど恐ろしいことはな

い。そして労働者が人間的な感情をもっていなければならないほど、ますますその労働は労働者にとっていやになるにちがいない。なぜなら労働者は、その労働のなかにある強制を自分自身には無用なもの、と感じるからである。……分業は、強制労働一般にみられる人間を動物化する作業を、さらにいく倍も強めた」(エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』、全集第二巻・S. 346, 訳・P. 350—351)。

(9) 労働者が自分の労働に対して無関心になるということは、一般的には、彼の労働が賃労働にすぎないということによって規定されている。ただしこのことは、原則上、彼は自分の労働がより高い賃銀を約束されるならば大抵の変化をうけ入れることを意味するからである。なお、こ無関心さは、労働の転変、労働の全面的可動性の一つの現実的前提をなすと同時に、その一表現であるところである(「ref. "K", III, S. 206—207, 訳・P. 247, "Resultate", s. 468—469, 訳・p. 69—70)。

(四)

二、労働時間の延長と労働の強化。

資本家にとっては、労働力の再生産に必要な労働時間をこえて行なわれる剰余労働の時間だけが、剰余価値を取得しうる唯一の時間である。だから、剰余労働時間を増大させるために、一日の労働時間を延長しようとする傾向は、資本の基本的傾向である。この傾向は、さらに、生産手段の稼動が休止されるならば資本にとって損失になるということによっても規定されている。なぜなら、生産手段は、休止期間中は無益な資本前貸を表わすだけであり、ばあいによっては、運転再開時に稼動のための追加支出さえ必要になるからである。

この資本の傾向は、機械制大工業以前まではまだ「控え目に見える」(「K», I, S. 286)が、機械制大工業の発展とともに、それは強烈かつ全面的に自己を主張するようになる。⁽¹⁰⁾

(10) 「今日たとえばマサチューセッツ州で、この北アメリカ共和国の現在まで最も自由な州で、一二才未満の子供の労働の国家

的制限として布告されているものは、イギリスでは一七世紀の半ばごろにはまだ血氣盛んな手工業者やたくましい農僕や巨人のような鍛冶屋の標準労働日だったのである」(『K. I. S. 287, 訳 P. 355』)。

「一八世紀の大部分をつうじて、大工業の時代にいたるまでは、まだイギリスの資本は労働力の週価値を支払うことによって労働者のまる一週間をわがものにすることに成功していなかった。……労働者たちが四日分の賃銀でまる一週間暮らすことができたという事情は、彼らには、残り二日間も資本家のために労働することの十分な理由だとは思われなかった」(『K. I. S. 290, 訳 P. 359』)。

機械の資本制的充用は、労働日延長の傾向をいっそう強めるための新たな誘因になる。けだしそれは、つぎの理由によつてである。

第一に、一日のうち同じ二台の機械の一方(A)が、他方(B)よりも二倍長く稼動させられて五年で更新されるとすれば、AはBが十年で吸収すると同量の剰余労働を吸収する(剰余価値年率の増大)。第二に、機械は物質的磨損のほかにはいわば無形の社会的な陳腐化の危険にさらされているが、その危険は、機械の総価値の再生産期間が短かいほど小さく、そしてその再生産期間は労働日が長いほど短かい。第三に、労働日を延長すれば、機械へ投下される資本部分が不変のまま生産規模を拡大したと同じ成果をあげうるし、固定資本価値がより少ない回転数で補填されてその前貸期間が短縮される。第四に、当該機械が独占化されているさいには、特別剰余価値がえられるから、資本はこの機会を最大限に利用せねばならない。第五に、機械が一般化すれば、機械によつてもたらされる労働者の相対的減少が剰余労働の絶対的增加によつて埋め合わされる必要が生ずる、等々である。

それゆえ、資本は数世紀を費やして労働日とその標準的な最大限度まで延長し、つぎにまたこの限界を越えて一二時間という自然日の限界まで延長したのであるが、大工業の誕生以降は、労働日延長への驚くべき突進がおきたので

ある。「風習と自然、年齢と性、昼と夜という限界は、ことごとく粉碎され」(“K”, I, S. 284)、十二時間—十五時間が常態となった。と同時に、昼夜をわかず労働力を搾取するために交替制がもたらされるようになる。

しかし労働者にとっては、労働日の延長は、他人を富ませるための時間の延長であり、彼には無益な時間の増大である。それは、彼の生命力のより多くの消耗であり、彼の個人的教養や知的向上、労働以外の社会的接触や肉体的、精神的生命力の自由な営み、等々のための時間の喪失にほかならない。だから、肉体的、精神的限界をこえて行なわれる労働日の延長は、労働者の労働力の正常な肉体的、精神的発達と活動の諸条件を喪失させ、労働力の消耗と荒廃をうながすことになる(また交替制は、それ自身が規則正しい正常な人間生活のリズムを破壊し、労働力の再生産に有害に作用する)。ところが資本家は、労働力の買い手の権利をふりかざして事情の許す限り容赦なくかかる限界をふみこえて労働日を延長しようとする⁽¹¹⁾。かかる欲求のすさまじさやその実現の諸結果については、周知のように『資本論』の「労働日」に関する部分⁽¹²⁾がその美事な歴史的証明を与えている。

(11) 資本家が労働力の買い手の権利に基づいて可能な限り労働日を延長させようとするのに対して、労働者は労働力の売手の権利——労働力の過渡な消費は、労働力の担い手の寿命をおびやかす、労働力の正常な価格を実現しえぬことになるから労働力の極端な消費を制限しようという権利——を主張し、労働日にある正常な長さ⁽¹³⁾に制限しようとする。したがって、労働日の標準化は、資本家と労働者階級との階級闘争として現われざるをえない。今日の標準労働時間は、何世紀にもわたるかかると争の歴史の結果である。この歴史が浮彫りにしているこのうち、さしあたりつぎの二点を摘出しておくことにしよう。

① 標準労働日を確定する必要は、資本の側からも生ずる。けだし、過渡労働による労働者階級の全般的で急激な衰弱は、資本家階級全体にとっての損失になるからである。しかしたとえそうであるにせよ、個々の資本にとっては「あとは野となれ山となれ」がモットーになるのであって、彼らは、労働者の寿命や健康には、国家的強制が加えられぬ限り配慮を払わないのである。

② 標準労働日の確定は、労働者のための自由な時間と、資本家のための時間との区別を明らかにし、労働者が自分自身の時間をあらかじめ計画的に配分することを可能ならしめる。また、標準労働日が短縮されるにつれて、彼らが種々の知識や精力的エネルギーをうる事が可能になり、政治運動に参加する機会が多く提供されるようになる。これらのことは、彼らが権力を獲得するための最も重要な前提の一つである。

なお、標準労働日の短縮は、一方では与えられた時間内により多くの力を流動させる労働能力——「労働の凝縮の主体的条件」(「K. I, S. 43」)——の創出をもたすが、資本に対しては、労働の強度を増加させる強い誘因を創出する。なぜなら、労働強度の増加は、同一時間内の労働支出を増加させ、労働の生産力の増大なしに相対的剰余価値を増加させる最も重要な方法だからである。だから機械の資本家的充用は、一方で労働日を短縮させて労働強度を増大させる「主体的条件」を創造するとすれば、他方では、労働強度を増大させる客体的で組織的な手段として役立つのであって、それは、機械の運転速度をはやめたり、機械の受持ち台数や範囲を拡大することによって達成されるのである。

無数の諸事実が証明しているように、かかる労働強化がある限度をこえて強制されるならば、労働力の健全な再生産がおびやかされることになる。

(12) 一般に相対的剰余価値の生産は、生活諸手段の生産における労働の生産性を高めて、労働者が同一時間内に同じ労働支出でより多くの生産物を生産しようようにし、主要な生活諸手段の価値を低下させて労働力の価値低下をもたらすことによつて行なわれる。だがここでのばあいには、同一労働時間内により多くの労働支出でより多くの生産が行なわれるのであって、個々の生産物の価値減少は生じていない。とはいえ、同一時間に入れられる生産物分量を増加させることで必要労働日部分を短縮させるといふ点では、労働の生産力を高めることと同じ作用をすることになる。したがって、同じ相対的剰余価値であつても、「相対的剰余価値の性格に一つの変化が現われてくる」(「K. I, S. 43」)といふことになる。

三、労働力の価値減少と労働の格下げ。

労働生産力の増大によって剰余価値生産が増進するということは、生活諸手段の価値減少を通じて労働力の価値が減少してゆくことと同義である。つまり、資本制的生産のもとでは、労働生産力のたえざる増加とそれにもなう労働力の価値減少は、同じ法則のメダルの両面である。

ところで、労働生産力の増大にもなう労働力の価値減少は、三つの側面(ないし三つの契機)において進行する。その第一は、生産力の増大にもなう生活諸手段の価値低下による労働力の価値減少である。第二は、機械の充用による労働の単純化を通じての育成費用の減少(または不要化)である。第三は、機械の使用にもなう婦人、未成年労働力の充用によって、労働力の価値分割が生ずることを通じてひきおこされる労働力の価値減少である。⁽¹³⁾

(13) 機械が労働を単純化し筋力をはぶく限りでは、機械は婦人、未成年労働者を充用する手段になるから、機械制大工業の開始とともに、成年男子労働者だけでなくその家族も働きにできるようになる。たとえば、夫だけでなく妻が働きにできると、それまで「一個」の労働力で表示されていた価値(仮に一〇〇とする)が「二個」の労働力で示されるから半分(五〇)になる(換言すれば、「一個」の労働力で表示されていた夫と妻の再生産費が、彼らのおのおのでおで表示される)。このさい、いままで通り一人だけで働きにでている成年男子の労働力の価値も低下することになる。なぜなら、同じ労働力は同一の市場価値をもたざるをえず、彼の労働力の価値と半分に低下した価値との総平均の結果は、従来の彼の価値を下廻らざるをえないからである。

他方、機械の資本主義的充用は労働力の価値減少をもたらすと同時に、それはまた、労働の格下げを必然化させ

る。すなわち、機械の充用にもなつてそれまでの複雑労働が簡單化され、不要化されるばあいには、この複雑労働に従事して比較的高給をとつていた労働者たちは、機械の補助的役割をはたすだけの労働——たとえば、荷役、清掃、整備をはじめ機械で行なうとかえつて費用のかかる補助的労働——に配転されたり、あるいは、その時期の社会で「低級な」労働と見なされている種類の労働に従事することを余儀なくされざるをえないのである。⁽¹⁴⁾

(14) 今日資本主義社会においても右の傾向が文字通り貫徹していることは、つぎの例によつても端的に示されている。たとえば、「新日本製鉄八幡」には約三万人近くの「下請工」が働いているといわれるが、彼らのなかには「炭鉱合理化」で山を追われた労働者が多数ふくまれている。彼らの労働は種々様々であるとはいへ、以前の労働よりもずっと「劣悪」なものである。主たる作業内容は、「……よく見ていくと、それは『産業の米』と鉄鋼資本が好んで使う『鉄』を生産する製鉄工場での付随作業でしかないことがわかる。大別すれば、荷役、運送、整備、梱包、建築、保温、スクラップ処理、築炉、保全、清掃、雑役、ということになるだろう」(深田俊祐著『新日鉄の底辺から』(三一書房、P. 69)。

六

四、機械の充用による労働者の排除、就業と生活状態の不安定化。

機械が労働者の手足や人的動力にとつて代わる限り、機械の大規模な資本制的充用は、それが行なわれる方面での労働者を排除する。

機械によつて過剰人口に転化される労働者たちは、一面では機械経営に対する手工業的、マニユファクチュア的経営の競争過程で没落すると同時に、他面では、すべての比較的侵入しやすすい産業部門に集中して労働市場をあふれさせ、労働力の価格をその価値以下に低下させる。一つの機械がある生産部門を除々にとらえてゆくばあいには、機械

はそれと競争する労働者層の慢性的窮乏を産出してゆくが、急激にとらえてゆくばあいには、彼らの窮乏化は大規模でかつ急激なかたちで進行する。その最も如実な実例の一つは、産業革命の過程で機械によって追われていったイギリスの木綿手織工の没落であろう。それは、「世界史上にこれ以上恐ろしい光景はない」(K. J. S. 454)といわれるほど悲惨なものであったが、他方、イギリスの木綿機械によって急激な影響をうけた東インドでは、「この窮乏は商業史上にほとんど比類のないものである。木綿織物工の骨はインドの野をまっ白にしている」⁽¹⁵⁾という結果をもたらしたのであった。およそ資本主義的生産様式は、労働条件にも労働生産物にも、労働者に対して独立化され疎外された姿を与えるのであるが、この姿はかくして機械によって完全な対立に発展する。だから、機械とともに始めて労働者の労働手段に対する激烈な反逆がはじまるのである。⁽¹⁶⁾

(15) この指摘は、一八三四—一八三五年に東インド総督が行なったものとして、マルクスにより利用されたものである (K. J. S. 455)。

(16) 一九世紀最初の一五年間にイギリスの工業地区で行なわれた機械の大量破壊、ことに蒸気織機を利用したためにおきたそれはラダイト運動としてよく知られている。なお一般的な意味で、機械うちこわし運動をラダイト運動と名付けるならば、それはすでにマニファクチャ時代からみられるのであって、この産業革命以前の運動と以降の運動との性格なり目的の相違を看過してはならない。この点で、前期の機械破壊と後期の機械破壊とを区分し、前者を機械自体への直接的敵意をもたず賃銀引下げに反対したり、その他の経済的要求を獲得する目的実現の手段として行なわれたものにとらえ、後者をば、一部では機械への直接的敵意をもつ運動であるが、他面では機械の充用による作用に反対する運動としてとらえ、さらに、「企業家」のうちで進んだ者に対する遅れた者の闘争手段としても扱っているホブズボームの研究が参考になる (E. J. Hobsbawm 'LABOURING MEN: studies in the history of labour' London 1964, 『イギリス労働史研究』所収「二、機械破壊者たち」鈴木、永井訳〈ミネルヴァ書房〉)。

ところで、機械経営によって多数の労働者が駆逐されるとはいえ、工場労働者の数は彼らによって駆逐される手工業者やマニファクチュア労働者をはるかに凌駕していく。だが、その発展においてこの経営様式が獲得する飛躍的拡張能力とその世界市場への依存性は、必然的に熱狂的生産と恐慌を生みだすがゆえに、産業は中位の活況、好況、恐慌、不況という諸局面をその周期的運動形式にするようになるのであって、それとともに労働者階級の就業と生活状態とがうけとる不安定性が常態になる。だから、工場労働者数の増加は、産業循環のなかでのみ実現されるのであり、労働者はたえず反撥されては吸引され、こずきまわされ、そのたびごとに新入工の性、年齢、熟練度が変化を蒙るようになる。

五、不変資本充用上の節約にともなう労働者の生命、健康の破壊。

不変資本充用上の節約は、生産手段が、結合労働者の共同的な生産手段として機能させられることによっても、または、生産手段を供給する諸部門自身で労働生産力が発達することによっても行なわれるが、そのいずれにせよ、社会的な労働生産力の発展の産物である。

資本制の大工業は、社会的労働の生産力を発展させ、生産条件の合理的節約を促進する反面、強烈な利潤欲と資本家たちに低コストの商品生産を強いる競争とによって、かかる生産条件の合理的節約に資本主義特有の性格を与える。すなわち、生産条件の節約を価値増殖の一手段に転化するのである。

資本家にとっては、工場等の空間的広さや、衛生、保安設備や、あるいは福利厚生施設などに対する出費の増大自体は、すべて利潤からの控除をなすのであるから、彼らは、直接充用する生きた労働をできるだけ節約しようとすると同時に、最低限にまで切り詰めた労働をできるだけ経済的条件のもとで充用しようとする。

他方、こうした不変資本充用上の節約は、それが資本の機能であり、利潤率増大の手段としてのみ行なわれるという面では、それは、労働者にとってはさしあたり無縁で無関心なことがらとして現われる。だが、自分の生活の大部分を生産過程ですごさねばならない労働者にとっては、生産過程の大部分が彼の生活条件をなしているから、かかる生産諸条件の資本家的節約は彼の生活条件の節約を意味し、したがってまた、彼らにおける労働災害、職業病、その他の健康阻害として現われざるをえない。資本家もっているあらゆる面での徹底したけちくささという性格と、彼らにおける人間材料そのものの徹底した浪費ぶり（人間の生命や健康に対する無頓着さ）とは、実に好一対をなすものといえよう。

なお、こうした傾向は、とりわけ「近代的家内工業」においては厳しく悲惨な形態で現われる。「機械経営によつてはじめて体系的に完成される生産手段の節約は、はじめから、同時に冷酷きわまる労働力の乱費なのであり、労働機能の正常な諸前提の強奪なのであるが、それが今では、一つの産業部門のなかで労働の社会的生産力や結合労働過程の技術的基礎の発展が不十分であればあるほど、このような敵対的な殺人的な面をますます多くさらけ出すのである」(『K', I, S. 486)。

ここで、すでに一世紀以上もまえに、マルクスが指摘したつぎの叙述が想起される。

「資本主義的生産様式に対しては最も簡単な清潔保健設備でさえも国家の側から強制法によつて押しつけられなければならないということ、これほどよくこの生産様式を特徴づけるものがあるか?……それと同時に、工場法のこの部分(清潔保健条項の部分——引用者)は、資本主義的生産様式はその本質上ある一定の点をこえてはどんな合理的改良をも許さないものだということを、的確に示してゐる」(『K', I, S. 505—506, 訳・P. 627—628)。

(16) 以上で明らかにされた法則が、昨今の我国で続発する労働災害やその他の諸災害に、あるいは種々の「公害」およびそれに対する「経営者」(その代弁者たる高級官僚や保守政党)の姿勢に、あまりにも的確に妥当している事実については、一言なりとふれずにすませぬほどのものがある。

我国の労働災害による年間死亡者数は、三十五年から四十六年までつねにほぼ六千人以上であり、とくに最近では事故の大型化が目だっているが、その原因については、労働省安全課でさえもつぎの点を認めざるをえなくなっている。「原因は、技術革新によって目まぐるしく合理化が進められ、機械設備作業方法などが大きく変っているのに……安全教育を十分にしないまま未熟練労働者を就労させているほか、安全性を無視した無理な生産第一主義(これは、「利潤至上主義」のゆがめられた表現にすぎない、引用者)がとられているからではないかと同省安全課はみている」(四十六年五月三十日付、朝日新聞)。

また、資本主義体制の不可避的産物たる現代のいわゆる「公害」については、もはや例をあげるまでもなく明白であろう。資本主義は世界中で文字通り、人間と自然とを破壊し、現実、に人類そのものの存在までおびやかすにいたっているのである。

(七)

六、労働手段・資本家への労働者の従属の発展。

機械の資本制的充用にともない、労働者がかつて彼らが生産した労働手段＝機械に従属し、それに使用されるようになり、資本家への彼の従属をよりいっそう深化させてゆく。このことは、機械制大工業における「労働疎外」のあり方の特徴的一面であるといえよう。

確かに、資本制的生産が、単純な労働過程であるだけでなく同時に価値増殖過程でもある限り、労働者が彼の労働条件を使用するのではなく、逆に労働条件が彼を使用するという転倒は、機械制大工業のみならず、あらゆる資本制的生産様式に共通している。しかし、この転倒は、機械制大工業において始めて技術的に明瞭な現実性をうけとる。

マニファクチュアでは、労働者が道具を使用し、彼から労働手段の運動が起り、彼は生きた労働機構の肢体をなしていたのであり、労働過程の技術的基礎は彼ら自身に属していた。しかし、工場では、労働過程の技術的基礎は機械の側に移っているのであって、ここでは、彼は労働手段（機械体系）の運動に自己を適合させ、従属せねばならぬ。また、ここでは、死んだ機構が彼らから独立に存在し、彼らは生きた付属物として、この機構に合体されるのである。さらに、機械制大工業の発展にともなって、個々の労働力の多くは、機械体系の特殊な一付属物としてのみ機能しつづけねばならず、「労働力の不具化」を余儀なくさせられる。すなわち、個々の労働力は、もはや特定の機械とはなれては——その独立した能力としては——役立たぬ存在になり、この面においても労働条件への従属を強いられることになるのである。

他方、労働手段の様な運動への労働の技術的従属と、男女およびさまざまな年齢層の個人から成っている労働組織の独自の構成や生産規模の巨大化等によって、工場内に厳しい規律ないし規則が作りだされるようになる。同時に、大工業における労働の社会化にともなって、資本家による指揮、統制、監督機能が強化され、発展させられてゆく。こうして、工場内部の諸「立法」（たとえば「就業規則」）の強化とその違反者への処罰——減給、格下げ、首切り等——をとめないつつ、個々の資本家の指揮、監督機能が多数の「産業士官や産業下士官」によって代行され、さらに、労働者を監視し管理するためのあらゆる「技法」や手数が発展させられてゆく。⁽¹⁷⁾

(17) つぎの「記事」をみられたい。大工場自身の内部における例ではないが、「指揮」あるいは「監督」手段の発展が現代ではどこまできているかという興味深い一つの実例が示されている。

「日産プリンス東京販売に勤める知り合いのセールスマンに電話をかけたら、あいにく留守。『でもすぐ連絡がつきますよ』

資本制的生産様式における「労働疎外」の考究

との返事なので待っていたところ、十分もたたないうちに本人が現われ、すぐ商談が始まった。……このスピードイナ連絡の「秘密」は彼の腰にぶらさがっているポケットベルである。本社の交換台がダイヤルを回すと、そのポケットベルが『ピーピー』と鳴りだして会社を呼んでいることを知らせる。……電電公社が、ポケットベルを開発したのは二年前。都内ならどこにいても連絡が可能。大きさもトランジスタラジオ並みで携帯に便利——ということで、自動車販売、証券会社、銀行などの外勤者をたくさんかかえているところから引っぱりダコ。営業部長や販売課長は、毎日ピーッ、ピーッと発信を送り「便利なものだ」とエツに入っているが、持たされるものは大恐怖。……『どこへ行っても会社の電波に追い回され、息つく暇がありませんよ。そう、一日で多い時に二十回ぐらい発信を受けますかな。知らんふりしていると社へ帰ったとき機械を調べらて、故障もしていないのに、さては連絡をわざとサボったな』と部長から大目玉。いやはや、大変な世の中になりましたよ。彼らは、同僚から『ピーッ、ピーッ族』と呼ばれ、ときには同情のまなざしでみられてる。しかし内勤者といえども、新しい機械文明の拘束からのがれることはできない。東京・芝の日本勧業銀行の『東京事務センター』。近代的なビルで働く約五百人のサラリーマンは、各室に取り付けられた二十六個の超小型テレビ・カメラでその作業ぶりがすべて「監視」されている。所長室には、受像機が置かれ、ボタンを押すと、どの課のどの人間が、いま何をしているかひと目でわかる仕組み。……」(読売新聞経済部編、『職場さばく』、P. 100—101)。

なお、後述するように、機械の充用にともなつて、婦人や未成年労働者の使用が広範に行なわれ、産業予備軍が形成される場合には、大量の安価な労働力が供給されて労働力の販売条件が悪化するのであつて、このことがまた、労働者の資本家への従属を強め、資本の専制支配を確立する槓杆として作用するのである。⁽¹⁸⁾

(18) 以前の労働様式を変化させずに単に労働時間の延長によって剰余労働を強制される関係が、「資本のもとへの労働の形式的従属」と規定されるのに対して、以上にのべてきたような資本のもとへの従属の発展は、「資本のもとへの労働の実質的従属」と規定される。絶対的剰余価値の生産が、「形式的従属」の物質的表現であるとするれば、相対的剰余価値の生産は、「実質的従属」の物質的表現である。他方、相対的剰余価値生産をとおして、資本制的生産様式が支配的になればなるほど、労働者の客体的および主体的労働諸条件が他人の所有物として彼に对立することも完全になり、資本のもとへの労働の形式的従属も

完全になる。つまり、實質的従属の条件および前提がいっそう完全になってゆく (ref. "K", I, S. 533, 訳 P. 661—662, "Resultate" S. 470—473, 岡部次郎訳〈大月書店 国民文庫版〉 P. 82—89)。

以上のように、「労働疎外」は、機械の充用や労働生産力の発達それ自体から生ずるのではない。それは、機械が資本家的に充用されること、生産力の発達が資本のもとで行なわれること、から生ずるのである。

それゆえ、労働者が、単に、生産的労働者だということ自体に彼の不幸が存するのではなく、彼が資本制的生産様式のもとで、「生産的労働者」だという点に彼の不幸が存するのである。⁽¹⁸⁾

(18) A・スミスをはじめとする古典派経済学者は、事実上、生産的労働の決定的特徴を剰余価値の生産に求め、剰余価値を生産する労働者だけを生産的労働者としてとらえている。それゆえ、彼らの生産的労働者の概念には、資本制的生産関係が内包されている。

単純な労働過程という立場からみれば、物的富を生産する労働が生産的労働である。労働過程が個人的性格を脱して協業および分業として行なわれるようになると、生産物は個人的生産者の直接的産物から社会的産物——生産に直接、間接に参加する諸成員の共同的産物——になる。このばあいには、ある労働者は直接に自分が手足を働かせなくても、全体労働者の一器官として機能していれば、生産物の生産にたずさわっていることになる。だからこれに依じて、生産的労働および生産的労働者の概念も拡張される。したがって、本稿第二節「Ⅱ」の単純な物質的生産に関する「生産的労働の本源的規定」は、全体としてみた全体的労働者には妥当するが、個別的にみた個々の成員については妥当しなくなる (ref. "K", I, S. 531—532, 訳 P. 660)。

他方、形態的観点からみるならば、生産的労働者はまず第一に商品を生産する労働者として規定される。「商品」は、ブルジョアの富の最も基本的な形態である。したがってまた、『生産的労働』について、それは『商品』を生産する労働だと説明することは、生産的労働とは資本を生産する労働だと説明する立場よりも、はるかにより基本的な立場に照応するものである」 ("Mehrwert" 26〈I〉, S. 143, 訳 P. 188)。

第二に、生産的労働者は、剰余価値あるいは資本を生産する労働者である。それゆえに、資本をつくる労働者だけが生産的

資本制的生産様式における「労働疎外」の考究

労働者だという規定は、これら二つの諸規定をふくんでいるということもできる (Ibid, S. 134, 訳 P. 176)。

B 蓄積過程における「労働疎外」の拡大再生産

(一)

これまでのところでは、「労働疎外」の考察は、資本制的生産過程の発展過程に照応してすすめられてきたとはいえ、それぞれの過程は個別的にとりあげられ、全体としての再生産過程という観点から考究されていたわけではない。だが、過程がそのたえざる流れと全社会的範囲とにおいて考察されるならば、資本制的生産過程の従来までにはみられなかった新しい特徴が、したがってまた、「労働疎外」のあり方の新たな特徴が浮彫りにされうるであろう。

資本制的生産の拡大してゆく規模での再生産は、原則として資本の蓄積——剰余価値の資本への再転化——を通じて行なわれる。だから、発展してゆく資本の生産過程は、本質的に資本の蓄積過程である。そこで以下では、当面する観点から資本の蓄積過程を究明することにしよう。

一、「労働疎外」、賃銀奴隷制の拡大再生産

当面する観点から、資本制的蓄積過程をその社会的範囲とたえざる流れにおいて観察するばあい、あらかじめ、第一の結論としてつぎの点を指摘しておくことができる。

すなわち、蓄積過程は、労働者階級そのものの拡大再生産であり、「賃銀奴隷制」、「労働疎外」の拡大再生産には

かならないという点がこれである。

生産過程は、ある時間ぎめでの労働力の購入で開始されるが、この開始は、定められた時間がすぎるたびに更新される。だが、労働者は、彼の労働力を支出して自分自身の価値と剰余価値とを商品に実現したあとで支払いを受ける。だから、彼は彼自身への支払元本である可変資本を、それが労働賃銀の形態で彼の手に入る以前に生産しているのであり、この元本を再生産する期間しか使用されない。

つまり、年々生産が継続されるためには、たえず前年度に、今年必要な生産物のすべてが労働者階級によって生産されていなくてはならぬのであって、労賃形態で彼らのもとへ還流するものは、彼ら自身がたえず再生産する生産物の一部（生活手段の一部）にすぎない。だから労賃は、彼らが右の生活手段を資本家階級から引き出すための「手形」であり、彼らの生活手段に与えられた「近代的」名称である。したがってまた、労賃にあてられる可変資本は、いわゆる「労働元本」^{フレンド}の資本制的形態にほかならない。

他方、蓄積過程がある期間行なわれるならば、資本のすべてが資本化された剰余価値、すなわち、労働者から等価なしで取得された価値——物化した不払労働——に転化する。⁽¹⁹⁾

(19) たとえば、最初に投下された一億円の資本から剰余価値が年々二十万円づつ生産され、年々同じ額づつ消費されるものとすれば、五年後には、消費された剰余価値の総額は一億円、つまり最初に投下された資本価値に等しくなる。この事実は、資本家が、「自分は他人の不払労働の産物たる剰余価値を消費したにすぎず、最初の資本価値はあくで自分のものとして維持しているのだ」と主張してみても少しも否定されない。その点は、ある人が、一定の不動産を担保にして借金をし、この借金を使い果してしまえば、この財産はもはや彼の借金を表示するにすぎないことを想起すれば明らかであろう。

それゆえ、資本家と労働者との階級関係は、奴隷主と奴隷との関係に本質的に共通している。つまり、労働者は、

彼が前年度に生産した労働元本を得るためには、資本家（彼の支配者）の物的基礎たる剰余生産物を無償労働によって提供することを義務づけられているのに対して、奴隷もまた、自分の労働元本だけでなく、彼の主人の生活を支える剰余生産物をも生産せねばならず、その限りでだけ、彼の労働元本をいわば餌として投げ与えられるにすぎぬからである。同様に、こうした関係は、自分の労働元本をつくる労働のほかに、領主のための賦役労働を義務づけられている農奴のばあいにもあてはまる。賃銀労働者との相違は、ただ、奴隷や農奴の労働が支配者による不払労働の経済的強制というかたちをとっているのにくらべて、賃労働のばあいには、平等な契約に基づく自由な労働、すべて支われた労働、というかたちをとる点にある。労働力の売買、労賃という形態は、右のような同じ本質的關係をおおい隠す形式でしかない。

労働者階級の労働元本の取得について考察したので、つぎに、この元本の個人的消費についてもみておこう。資本の蓄積過程という観点からみるならば、労働者階級の個人的消費もまた、彼らの生産的消費と同様に、資本に属した「事柄」であり、蓄積の単なる一契機にすぎない。

なぜなら、第一に、彼らの個人的消費——彼らの労働力の再生産——は、資本にとって不可欠な生産要因・搾取材料・そのものの再生産にほかならないからである。このことは、労働者が、「自分は資本家階級のために個人生活を営むのではなく、自分自身のためにのみ営んでいるのだ」と主張しても少しも否定されえない。それは、役畜の食物は役畜自身が味わうのだという理由によって、役畜の行なう消費が生産過程の必然的一契機をなすことを否定しえないのと同じである。⁽²⁰⁾第二に、労働者階級の個人的消費は、支払われた賃銀による諸商品の購入によって行なわれる点で、資本家階級のもとへの貨幣の還流、可変資本部分の再現をうながすからである。

(20) 労働者階級の個人的消費が、どんなに資本蓄積の絶対的条件だとしても、もちろんこの条件の充足は、労働者たちの個人的な「自由意志」と欲求にゆだねられている。そして資本家階級は、安んじてこのことを彼らの「自由な」営みにゆだねておくことができる。つぎのサラリーマン心得とでもいいうる「説教」は、右の真理の美事な「現代的告白」ともいえよう。

「出勤するサラリーマンは戦場に向かう武士と同じ。これから食うか食われるかの戦いに臨む者は、身体をベスト・コンディションに保つべきである。何に費やしても、自由な勤務外時間ではあっても、明日の労働の再生産のために最小限の時間を割くことは、サラリーマンの責任である。……次の三案を勧める。①うんと食え メシやソバなどではなく、肉や野菜を馬のように食え。キミの若い胃腸はこの勧めなら大歓迎のはずだ。②うんと眠れ それは夜、眠るにこしたことはないが、事情があつて夜眠れなかった場合は、会社をサボつてでも昼間眠れ。今日一日のサボタージュは将来の十日の病欠を救うことになる。③頭の切りかえに工夫をこらせ 精神のストレスは単なる休養では回復しない。必要なのは気分転換、頭の切りかえである。……要するに、キミがどんなに優秀で上役連から将来を嘱望されていても病気になるたら、ハイ、それまでであることを忘れるな。……キミが上役共からどんなにオダテラしても、キミぐらいの才能を持っている者はゴマンとおり、サラリーマンは所詮、代替えのぎく一個の歯車にすぎないことを知っておくべきである」(雪代敬太郎著『選ばれる社員になる法』へ日本文芸社、P. 50—52)。

以上要するに、労働者階級は、直接的生産過程の内部でも外部でも、つねに資本に属し、自分の労働元本をうるために、彼らに自分の剰余労働を無償で提供することを強制された立場におかれていることがわかる。かかる彼らの立場には、「賃銀奴隷」という表現がびつたりと妥当する。「ローマの奴隷は鎖によって、賃銀労働者は見えない糸によつて、その所有者につながれている」(“K”, I, S. 599)。

ところで、生産手段と労働力との分離は、資本制的生産の出発点であり、労働力の売買という行為の根底にあつて買手手を最初から生産手段の所有者とし、売り手を最初からその非所有者として位置づける資本制的生産関係にはかならなかつた。また、すでにみたように、この分離は、生産者に対する生産手段の疎外にはかならなかつた。この分

離を基礎にして、労働力が資本の一要素と化し、労働が労働主体とは無縁な資本の労働として行なわれ、その生産物も資本のものとして主体から遠ざかり、独立化したのであった。

ところが、はじめは出発点であり、前提であったものが、過程の連続においてつねに結果として生産され、永久化される。

一方では、生産過程においてたえず物的富が資本家のための価値増殖手段と享楽手段に転化され、ますます増大してゆく労働の社会的生産力が資本の生産力として集積される。他方では、生産過程からたえず労働者がそこに入ったときと同じ姿で——富を自分のために実現する一切の手段を喪失した姿で——出てくる。「彼がこの過程に入る前に、彼自身の労働は彼自身から疎外され、資本家のもものとされ、資本に合体されているのだから、その労働はこの過程のなかで絶えず他人の生産物に対象化されるのである」(K., I, S. 396)。

そして再び、右の生産物が資本に転化されるのであるから、労働者は、たえず客体的な富をば、彼を支配し搾取する他人の力として生産すると同時に、資本家もまた、たえず労働力を自己の単なる一要素として生産することになる。換言すれば、労働者を賃銀奴隷として生産するのである。

それゆえ、資本の蓄積過程は、資本制的生産関係の拡大された規模での再生産であり、賃銀奴隷ないし「労働疎外」の拡大再生産である。

(二)

蓄積過程をみれば、前年度に剰余価値を獲得してこれを所有していることが、今年度に新しい剰余価値を獲得する

条件になっていることがわかる。たとえば、剰余価値率二〇〇パーセントで、十億円の可変資本によって二億円の剰余価値を獲得し、次年度にこの二億円を原資本へ追加してここから四千万円の剰余価値をえ、さらに三年目に蓄積した四千万円から八百万円の剰余価値を獲得するという諸過程を仮定してみよう。このばあい、第二年度に追加資本から四千万円の剰余価値がえられる前提条件は、初年度に二億円の剰余価値が取得されていることである。同様に、第三年度に八百万円の剰余価値が追加されるのは、前年度に四千万円の剰余価値が獲得されているからである。このように、過去の不払労働を取得し所有していることが、生きている不払労働をますます大きな規模で取得するための唯一の条件として現われる。

単純な商品生産のもとでは、生産者は自分の所有物である生産手段を使って労働を行ない、この自己労働によって取得した生産物を商品として他人に譲渡することにより、他人の生産物を領有することができた。ここで他人の生産物を領有する形態が譲渡として現われるのは、まもなくして、生産者が生産物を自己労働によって領有し所有していたからである。つまり、自己労働が他人の生産物を領有する根拠をなし、領有の本源的方法となっていたからである。

これに反して蓄積過程では、最初から生産手段が他人の所有物であり、その結果として、自分で行なった労働の結果が自分の所有に属すことなく他人の所有するところとなるのであって、労働生産物の領有なし所有が、自己労働ではなしに「所有」に基づいて行なわれる。しかもこの「所有」は、もっぱら、より多くの他人の不払労働を領有する基礎になっているのである。他方、「労働」は、自分の生産物を領有しえぬどころか、過去に搾取された不払労働をさらに新たな不払労働によって増大させることよってのみ、労働力として機能しうることとなっている。したがって、単純な商品生産の私法則または領有法則に対して、資本制的蓄積のそれは、資本制的生産の領有法則として

——より端的に言えば、資本制的収奪の法則として——特徴づけられねばならない。

それゆえ、蓄積過程にあっては、商品生産の領有または所有の法則が、その正反対の法則に転変しているのであるが、かかる転変は、前者の侵害から生ずるのではなく、その貫徹の必然的結果から生ずるのである。このことは、蓄積を終点とする商品生産から資本制的生産への発展をつぎのように簡単にふり返ってみればいっそう明白になる。

① 商品生産の内在的諸法則は、自らを商品生産者たちの競争法則として主張し、一定の段階で彼らの「分解」、すなわち一方での没落（生産手段の喪失）と他方での貨幣と生産手段との集積をもたらし、またその結果として、前者の側での労働力の販売、後者の側での労働力の購入を、要するに労働力の商品への転化をもたらず。

② 労働力の売買においては、当事者たちは相互に「自由な」意志で、「平等な」立場に立って自己の所有する等価物と等価物とを交換しあう。このさい、労働力が価値を形成し増殖するという独自の使用価値をそなえているということは、商品交換の諸法則を少しも侵害するものではない。というのは、交換の諸法則は、諸商品の使用価値の相違を前提しているからである。

③ 労働力の消費による剰余価値の生産と蓄積。ここでは、すでに示した法則の転変が生ずる。だが、この転変は、交換諸法則に従って購入した商品の使用価値を充用し發揮させた結果として生じただけであって、取引後のかかる使用価値の發揮が、取引における諸法則自身とかわりないことは明らかである。

他方、資本家に領有された商品が流通過程に入るときは、つねに交換の諸法則に従う。すなわち、資本制的生産様式が支配的になり、蓄積の列がどんなに継続しても、それぞれの交換行為が生産過程との関連や階級関係と切り離して個別的にだけ観察されるならば、商品生産の諸法則が依然として有効性を保持しているのである。

以上、要するに、「商品生産がそれ自身の内在的諸法則に従って資本主義的生産に成長してゆくにつれて、それと同じ度合で商品生産の所有法則は資本主義的取得の諸法則に転変するのである」(「K. I, S. 613, 訳, P. 765, ゴチックは引用者)。そしてかかる転変は、労働力が商品として売買されれば不可避的になるが、しかし、そのときから商品生産は一般化し、その内在的諸法則が完全に展開するようになるのである。

前述の考察からすれば、右の「転変」が、単なる論理上の転変ではなく、商品生産の発展に照応する人間労働の現実的あり方の変化を意味していることは明瞭である。それは、労働と所有との一致・労働力と生産手段との結合・がそれらの分離へ転化する事、生産と所有における「主体」が生きた労働から物象へと転位すること、労働者の使用していた生産手段が他人の所有物として彼から自立化し、彼はこの生産手段 \parallel 資本に従属しそれによって使われ、自分の労働をも奪われるようになること等を意味しているのである。

それゆえ、右の「転変」は、同時に、「労働疎外」の端初的形態から資本制的生産におけるその完成された形態への発展にほかならない。⁽²¹⁾

(21) 以上にみられるように、「蓄積論」の当該部分においては、商品生産の諸法則が一定の発展段階で必然的に資本家的生産を生みだすこと、しかもそのためには暴力などは全然不要であることが論証されている。とはいえ、かかる過程は、長期間にわたるきわめて緩慢な足取りで進行するのであり、封建制社会の資本制社会への転化のさいには、国家権力を楨杆として急速な「分解」、労働力と生産手段との分離、が暴力的に遂行されざるをえぬこともまた明瞭である。

(三)

二、資本制的蓄積の一般的法則

資本制的生産様式における「労働疎外」の考究

いままでに、蓄積過程は賃銀奴隷あるいは「労働疎外」の拡大された規模での再生産だということが明らかにされた。しかし、蓄積過程の理解は、それらの規模が単に拡大してゆくことだという面だけに留められては不十分である。それらの量的規模の拡大が、同時に、蓄積機構の作用を通じて、それらの質的深化をもたらすという面が検出されねばならない。つぎにこの側面を、資本制的蓄積の一般的法則として考察してゆこう。

この考察で最も重要な要因をなすものは、資本の構成が蓄積の運動中でうけとる諸変化である。資本の構成は、使用価値の面では生産手段と労働力の量的比率によって規定され、価値の面では不変資本と可変資本との比率によって規定される。前者は資本の技術的構成、後者は資本の価値構成と呼ばれる。そして、前者によって規定されてその諸変化を反映する限りでの後者が、資本の有機的構成と呼ばれる⁽²²⁾。以下で扱われるのは、結局のところ、全生産部門の平均的構成、社会的総資本の有機的構成である。

(22) 労働生産力の増加は、資本の技術的構成の変化——生産手段分量が労働量にくらべて増大するという変化——をもたすが、この変化は資本の価値構成に、不変資本に対する可変資本の比率的減少として、有機的構成の高度化として反映する。ただし、価値構成の変化は、前者の変化を近似的に（より小さな規模で）のみ反映する。けだし、新たな生産方法の導入は、それが代置しうる労働力より安価な限りで行なわれるからであり、また機械による機械の生産を通じて、機械の価値が大幅に低下してゆくからである。

さしあたりまず、資本の有機的構成が不変な場合を考えてみよう。

この場合には、蓄積の進行は、不変資本部分の増加とともに可変資本部分を増加させる。そして可変部分の増大は、労働需要の増加をうながすことによって労働力の販売条件を有利にし、賃銀を高め、労働者数を増加させるように作用する。

しかし、労働者がつねに本質上で賃銀奴隷の地位に留まらざるをえないということは、労働力の販売条件がいかに有利になっても変わりはない。労働力の販売は、それが不払労働を提供することを前提にしている以上、労賃の上昇は、せいぜいのところこの不払労働の分量の減少を意味するにすぎないのである。

しかも、労賃上昇は不払労働の減少にほかならないから、その減少が蓄積をおびやかすようになれば、蓄積欲がおとろえ、早晚、可変資本が減少して労賃上昇にブレーキがかけられざるをえない。このことは現実の蓄積運動が証明しているとおりであって、労賃の上昇運動は、蓄積を保障する枠内に厳重に閉じ込められているのである。⁽²³⁾

(23) 「ここでは労働者が現存の価値の増殖欲求のために存在するのであって、その反対に対象的な富が労働者の発展欲求のために存在するのではないという生産様式では、そうであるよりほかはないのである。人間は、宗教では自分の頭の作り物に支配されるが、同様に資本主義的生産では自分の手の作り物に支配されるのである」(『K. J. S. 649, 訳 P. 810—811』)。

つぎに、有機的構成が高度化する場合をみてみよう。

相対的剰余価値生産の考察から明らかなように、蓄積の進行途上においては、労働生産力の増加が蓄積の最も強力な契機になる場合が生ずる。

労働生産力の増大は、その労働量によって動かされる生産手段量に比べて労働量が減少する点に現われる。それゆえ、労働生産力の増大によって蓄積が進行するさいには、不変資本に比べて可変資本の相対的減少が生じ、労働需要の相対的減少がもたらされる。

蓄積と生産力の増大は、相互に刺激しあい促進しあつて資本の有機的構成を高度化し、可変部分の相対的減少を加速的に進展させてゆくが、この過程で特徴的なことは、可変成分の相対的減少の進展が通常の蓄積のそれよりもいっ

そう急速だということである。換言すれば、可変成分の相対的大きさを減少させるエネルギーが累増するのに比べて、その絶対量を増大させるエネルギーが衰えてゆくのである。かかる特徴が生ずるのは、大工業の発展につれて、(一)、資本の集中、(二)、原資本の更新や資本の追加、(三)、労働の内包的、外延的強化、(四)、大量の安価な労働力供給、等々の諸要因が不可避的に作用することによってである。²⁴⁾

(24) 個別的諸資本の競争においては、一方が他方を破ってこれを吸収してゆく過程がつねにみられる。この過程は、生産手段や労働力の単純な集積(または蓄積)とは区別される既成資本の集中中である。それは、資本家による資本家の収奪、少数の大資本への多数の弱小資本の転化であり、既存資本の量的編成上の変更であって、その範囲を蓄積の絶対的限界によって制限されることはない。かかる集中は、合併とか株式会社形成など種々な形態をとって行なわれるが、いずれにせよ——資本の漸次的増加として行なわれる蓄積に比べて、一挙に資本の増大をもたらし、個別的生産過程を社会的に結合して労働力を飛躍的に高め、有機的構成の飛躍的高度化を促すように作用する。(二)、資本の増加や原資本の更新は、新しい発明と発見あるいは新生産方法などの導入の機会を与える点で、構成高度化の契機として作用する。(三)、また、搾取の内包的・外延的強化が行なわれることにより、同量の労働力で可変成分をそれほど増大させることなしにより多くの生産手段が運動させられ、構成が高められる。さらに、婦人や未成年労働者の大量の充用によっても、同量の可変資本でより多くの生産手段を運動させ、不変資本を増大させることができる。

右のような総資本の増加よりも急速な可変部分の比率的減少は、逆に、労働需要の増加以上に労働者人口が絶対的に増加するのように見られがちである。だがそうではなく、資本制的蓄積が、その精力と規模とに応じて、たえず相対的に余分な労働者人口を生み出すのである。

いうまでもなく可変部分の相対的で累進的な、かつ急速な減少は、可変部分の絶対分量の増加を排除するものではなく、それをともなう過程である。換言すれば、蓄積過程は、可変部分の絶対的増加の傾向と、その相対的で累進的

な減少の傾向という相反する二つの傾向が同時に作用しあう一過程にほかならない。

このことは、蓄積過程の進行が、つぎのような過程——つまり、労働需要の大きさが不変であったり、絶対的に減少したり、あるいは絶対的に増大するというケースがあらゆる種々の部門で絡みあいながら進展する過程——だということの意味している。

他方、蓄積過程の進行は、資本の蓄積欲が、ある局面では爆発的に増大したり、次の局面では一挙に激減したりすることをふくんでいる。そして、労働需要はそのときどきの蓄積欲の大きさによって規定されているから、蓄積欲の大きさがその継続的増加の平均よりも低下する場合には、それまで「正常」であった労働供給が異常なもの（過剰なもの）にならざるをえなくなる。

さらに、かかる「事態」が生ずる規模は、前述したように、資本の集中その他の諸要因の作用が強まるにつれて拡大され、その期間も短縮される。したがって、蓄積過程における可変資本部分の相対的累減の法則は、相対的過剰人口のたえざる形成と再生産を不可避にすることになる。ここで「相対的」というのは、労働人口が現実の富と生産力にとって絶対的に過剰なのではなく、資本にとってのみ過剰なのだという意味である。⁽²⁵⁾

(25) この「相対的」という意味は、より詳しくいえば、第一に資本制的生産様式にのみ独自で歴史的な、という意味と、第二に、蓄積運動における諸局面を通じての資本の平均的増殖欲にとって余分な、という意味である。

(四)

相対的過剰人口は、蓄積運動によって形成されるや否や、今度は蓄積運動それ自身の不可欠な条件になる。

第一に、労働生産力と蓄積の発展につれて増大するところの突発的な資本の膨張力は、一定諸部門での突然で大量の労働需要を生みますが、そのさい、他部門の生産規模を害することなしに大量の労働人口を一挙に投入するためには、現実の自然人口の増加に制約されない相対的過剰人口の存在が不可欠の条件になるのである。

したがって、中位の活況、好況、恐慌、不況という近代の産業の周期的循環という運動形式も、この相対的過剰人口と産業予備軍の形成とそのたえざる存在とに基づいている。他方、産業循環の諸局面自身が、今度は、相対的過剰人口を再生産する最も強力な要因の一つとして作用する。

第二に、大工業の発達とともに労働力の外延的または内包的搾取の増大が生ずるが、予備軍の存在は、就業労働者に圧力を——いつでも予備部分によって代置されうるといふ圧力を——加えて、彼らに過渡労働や資本への屈従をいっそう余儀なくさせる。そして、このことによつて、より大きい可変資本がより多くの労働者を求めることなしに、より多量の労働を流動させ、また同じ大きさの可変資本が同量の労働力でより多くの労働を流動させるようになる。加えて、機械の充用によつてより「高級な」労働力がより「低級な」労働力によつて駆逐される。こうした点でも、産業予備軍は、有利な蓄積の拡大とその進行を保証する楨杆になるのである。

他方、以上のことから、予備軍の生産は、蓄積の進行につれて加速される可変資本部分の比率的減少よりも、もっと速く進行するものであることがわかる。

第三に、産業予備軍の膨張と収縮によつて、労賃の一般的運動が規制される。すなわち、労働の需要供給の運動は、資本のそのときどきの増殖欲によつて規制されるのであり、予備軍は、右の需給法則の作用範囲をば、資本の蓄積欲に適合する限界内に押しこむのである。換言すれば、資本制的蓄積機構は、予備軍を創出して資本の絶対的増大

が一般的労働需要の対応的増大を伴うことのないようにするのである。だから、労働需要イコール資本増加ではなく、また労働供給イコール労働者階級の増加ではない。互いに独立な二つの力が互いに作用しあうのではなく、一方で蓄積が労働需要をふやすとき、他方でその蓄積が労働者の「遊離」によって労働者の供給をふやすのであり、同時に予備軍の圧迫が就業者に、より多くの労働をさせることを強要してある程度まで労働供給を労働者供給から独立させるのである。かくして、この基礎上で行なわれる労働の需給法則の運動は、資本の専制を完成するのであり、「労働の価格」をつねに労働力の価値以下に低下させるのである。

相対的過剰人口は、流動的、潜在的、停滞的という三つの形態で実存する。流動的形態にある過剰人口は、工場、鉱山、マニファクチュアなどの産業の中心においてときには反撥され、ときには吸収されるという形で存在する。

潜在的過剰人口は、農村人口などにみられるように自発的か否かを問わず労働者に移行しようと期待している部分である。停滞的過剰人口は、現役労働者の一部をなしているが、その就業がきわめて不規則であり、労働および生活諸条件もきわめて劣悪な部分（たとえば、家内労働者）である。さらに、相対的過剰人口の最下層の沈澱層ともいべき部分は、被救護貧民である。彼らは、本来のルンペン・プロレタリアートを別にすると、労働能力者、孤児および貧児、零落者、労働不能者（不具者、病弱者）などからなっている。この層の生産の必然性は、相対的過剰人口の生産の必然性のうちにふくまれており、それは相対的過剰人口とともに、富の資本制的生産と発展の一条件をなしている。

以上からして、資本制的蓄積の一般的法則はつぎのように定式化される。

「社会的な富、現に機能している資本、その増大の規模とエネルギー、したがってまたプロレタリアートの絶対的

な大きさとその労働の生産力、これらのものが大きくなればなるほど、産業予備軍も大きくなる。自由に利用される労働力は、資本の膨張力を発展させるのと同じ原因によって、発展させられる。つまり、産業予備軍の相対的な大きさは富の諸力といっしょに増大する。しかしまた、この予備軍が現役労働者軍に比べて大きくなればなるほど、固定した過剰人口はますます大量になり、その貧困はその労働苦に反比例する。最後に、労働者階級の極貧層と産業予備軍とが大きくなればなるほど、公認の受救護貧困層もますます大きくなる。これが資本主義的蓄積の絶対的な、一般的な法則である」(『K』, I, S. 673—674, 訳, P. 839)。

みられるように、資本制的蓄積の機構は、労働者人口を資本の増殖欲に適合させるのであって、その最初の方法が相対的過剰人口の創出であるとすれば、その最後の方法は、現役労働者軍の累増せる貧困と受救護民の死重なのである。

社会的生産力の発達によって、累減してゆく人間力の支出でつねに累増する生産手段の分量を動かさうようになるという法則が、資本制的生産様式の基礎上では、労働の生産力が増大すればするほど、労働者の雇用手段が減少し、彼らの生存条件がますます不安定化するという形で現われる。つまり、生産的人口よりも労働生産力のほうが急速に増加するということが、逆に労働者人口が資本の増殖欲よりも急速に増加するという形で現われるのである。

また、すでにみたように、この生産様式においては、労働の社会的生産力を高める方法はすべて労働者の犠牲において行なわれ、生産の発展のための手段は、すべて生産者を支配し搾取するための手段と化し、労働者を不具にして部分人間とし、彼を機械の付属物にひきさげ、彼の労働の苦痛で労働の内容を破壊し、労働過程の精神的諸力を彼から疎外する、さらに、彼の労働諸条件をゆがめ、労働過程では彼を資本の専制に服従させ、彼の生活時間を資本のた

めの労働時間にしてしまい、彼の妻子までを搾取材料として資本に投げ出さざるを余儀なくさせるのである。そして、剰余価値生産のすべての方法が同時に蓄積の方法であり、逆に、蓄積の拡大は右の方法の手段になるからして、蓄積の進展につれて労働者の状態ないし地位、運命は悪化せざるをえないことになる。この必然性は、疑いもなく彼の給与の高低に係りなく貫徹するといわねばならない。

さらに、相対的過剰人口をたえず蓄積欲に均衡させておくという法則は、労働者を完全に資本へ縛りつけ、資本の蓄積に対応する貧困の蓄積を必然的にする。「だから、一方の極での富の蓄積は、同時に反対の極での、すなわち自分の生産物を資本として生産する階級の側での、貧困、労働苦、奴隷状態、無知、粗暴、道徳的墮落の蓄積なのである」(K^a I, S. 673-674)。それゆえ、「労働疎外」は、蓄積の作用を通じていっそうその規模を拡大させられると同時に、その内容も以上のようにいっそう深化させられてゆくのである。⁽²⁶⁾

だが、「労働疎外」は、その発展において、自分自身をも止揚する主体的、客観的諸条件を生みだし成熟させてゆく過程でもある。このことは、絶対に看過してはならない。われわれは、この考察を、次節で行なうことにしよう。

(26) 「……資本所有(収入は別として)はたえず増大するであろうし、価値のうちで個々の労働者や労働者階級でさえもが占ぐりだす部分の割合は、資本として彼らに相対する彼らの過去の労働の生産物に比べて、ますます減ってゆくであろう。それとともに、労働能力と、資本として独立させられた客観的な労働条件とのあいだの疎外と対立も、たえず増大する」(“Mehrwert”, II, S. 418, 註 P. 559)。

一九七二、五、十五。